

英語の勉強法

私は今八十五歳である。今年もこの四月八日（火）、上高瀬小学校の入学式に参列させてもらった。そして、自分の小学校、中学校、高校、大学の入学式を懐かしく思い出したのだった。

太平洋戦争敗戦の翌年、昭和二十一（一九四六）年四月、上高瀬小学校ではなく、戦前の名残・上高瀬国民学校に入学した。男子組、女子組だった。男子は六十人近く居たと思う。二人用の長机と長椅子、右隣は大井英臣君だった。一年間席替えなし。生涯離れられぬ友情で結ばれた始まりだった。二年生から上高瀬小学校と名称が変わり、男女混合の組になった。私達の学年の小学校六年間（一年の時は国民学校）、日本は丸丸アメリカの進駐軍の統治下にあった。そんな中で、四年生でローマ字を習った。そして、中国の簡体字ほどではないにしても、画数の多い漢字は簡略化された。例えば、折角覚えた「學」は「学」に、「國」は「国」に変わった。生徒も大変だったけど、先生はもっと大変だったのではないか。

昭和二十七（一九五二）年四月、開校したばかりの三ヶ村組合立東中学校に入学した。未だ体育館は無く、運動場での入学式だった。三ヶ村とは、上高瀬村、勝間村、比地二村である。学校は現在の未来創造館の場所にあり、三年後高瀬町誕生により高瀬中部中

学校と名称変更した。

一クラス五十人の五クラスあった。これからは英語の時代が来る、英語だけは勉強しなければと張り切っていたように思う。私は一年四組だった。学級担任は社会科担当の矢野由夫先生だった。嬉しいことに、小学校一年から大の仲良しの大井英臣君と同じクラスだった。英語は安藤陽一先生、大井君は、英語のテストはいつも満点だった。

二年生になる時に組替えがあった。二年二組だった。またまた嬉しいことに大井君と同じ組になった。担任も矢野先生だった。十一月に、高瀬市（下高瀬本門寺大坊市）へ行こうと大井君の家へ寄った。どうした訳か、こんな会話をした。

「大井君は勉強がよう出来てええのう」

「小野君は、家での位の時間勉強しよんや」

「テストの時はするけど、普段はあんまりしよらん」

「それはいかんわ。ほんなら高瀬市へ行くん止めて、今から一緒に勉強するか」

「おお、そらそれでも構わんぞ」

それから英語の勉強を始めた。大井君は、

「教科書の今日習った所を開いて見ていてくれ」

と言うなり、教科書を開かないで読んでいった。完璧に暗誦していたのだ。私はびっく

りした。

「英語は覚えるしかない。覚えるのは教科書しかない。予習は新しい単語を辞書で調べてノートに書く。後は文の意味を考えながら、ゆっくりと十回位読む。それだけや。復習は、暗誦出来ているか確認するだけや。小野君も僕と同じようにして英語の勉強してみいや。百点取れると思うよ」

大井君は私に、かんで含めるように、英語の勉強の仕方を教えてくれた。大井君が言われた事を、私は誓いを立てて実行した。それからというもの、私も英語は九十五点を下ることはなかったように思う。

冬休みになった。午前中は、大井君は野球部、私は陸上部の練習がある。大井君が、「昼ご飯をウチで食べて夕方まで一緒に勉強しよう」と言ってくれる。勿論私は即座にOKした。私は母に、冬休みは昼から夕方まで大井君の家で勉強することにしたと話して、日曜日は一日中手伝いをするからと、父に頼んでおいてくれとお願いした。

大井君の家で勉強が終わって帰る時には、大井君は私に「帰ったらこれだけ勉強しておくように」と宿題を出してくれた。

三学期の初めに、英・数・国の実力テストがある。結果は三十番まで廊下に張り出される。大井君は大体一番だった。私は百番以内に入ったことは無かったと思う。数日後

に、突然担任の矢野先生に呼ばれた。

「何だろう？」と先生の前に立った。

「健一君、びっくりじゃ。今度の実力テスト四番ぞ。どなんしたんぞ」

「それ、ほんまな。冬休み中、毎日大井君と一緒に勉強したんや」

二年生の三学期から、大井君は生徒会長である。後任の学級委員長長の選挙をしなければならぬ。一年生から二年生のそれまで、学級委員長は当然のこと、文化委員、体育委員、図書委員、経理委員の何れにも一度もなかったことがない。それがどうしたことか、ほぼ満票で私に決まってしまったのだ。私は「ようせん」と拒否したが、矢野先生に二日ばかりで説得されて仕方なく引き受ける羽目になった。

昭和三十（一九五五）年四月、高瀬高校へ入学した。一クラス五十六人の四クラスだった。大井君は一組、私は二組だった。私と大井君は一緒に陸上部に入って、一日も休まず練習に励んだ。一年生の終業式の前日である。陸上の練習が終わって、大井君と私は顧問の秋山昌弘先生に呼ばれた。

「今日で陸上部を退部せよ。お前ら二人は走っている場合ではない。しっかり勉強して大学へ行け。それが、お前ら二人が社会へ貢献するために進むべき道じゃ」と、数時間に亘って淳々と諭された。二人は泣く泣く退部した。

二年生になって組替えがあった。私は一組、担任は英語の牧忠雄先生、大井君は三組、

担任は陸上部の秋山昌弘先生だった。夏休み前、大井君が私に、夏休み中の英語の勉強法について聞きに、牧先生の所へ一緒に行こう、と私を誘う。大井君は英語の学力は学年でトップ、私は遠く及ばないが、金魚の糞になって付いて行った。

「夏休み中に英語の実力をもっともっと付けたいんだけど、どうしたらよいでしょうか」大井君は単刀直入に質問した、先生は即答された。

「夏休み中にか。時間はあるわのう。それは簡単なことじゃ。原書を読め。大井は「アニマル・ファーム」、小野は「ハイジ」を読め。帰りに政本の本屋へ寄って注文しとけ。

一週間もすれば届くじゃろ」

「ハイジ」か。小学校五年の時に読んで痛く感動したあの本か。ようし、高校生じゃ。今度は英語で読むぞ。気合がかかってきた。

夏休みの初日に本は届いた。黄緑色の硬い表紙の分厚い本だった。

朝起きてから夜寝るまで、毎日ぶっ通しで十日以上かかったかなあ。その間、他の勉強は一切しないで、辞書を片手に読み通した。

二学期の最初の実力テスト、実力が付いている実感があった。それまでよりうんと点が上がっていた。以降、英語の勉強は、授業の予習と復習、それに課外を受けるだけ。

参考書は一冊も買わずだった。それでもまあまあの自分でも納得出来る実力が付いたのは、ハイジを根気良く読み通したお陰だと思っている。

発達心理学では、機械的記憶力は十五〜十六歳で頂点に達し、論理的記憶力は二十五歳で頂点に達すると教えている。また、十五〜十六歳は正に自我の目覚めの時である。自分が自分を鍛えることの出来る年齢である。その自我を鍛えた能力こそが、生涯に亘りその人の能力となり、知恵となり、性格となってその人物を形成するのではないか。七十年前の中学生、高校生の時の英語の勉強を振り返り、つくづくとそんな思いに至るのである。

（令和七年五月一日）